

ガラテヤ書4章1-11節 「幼稚な教え」

1A 奴隷から子の身分へ 1-7

1B 後見人の下にいる子供 1-3

2B 大人への贖い 4-5

3B 子としての特権 6-7

2A 奴隷への後戻り 8-11

本文

ガラテヤ人への手紙4章を開いてください。私たちは、ガラテヤ人の信者が律法主義に陥ってしまっているところを、使徒パウロが何とかしてキリストにある自由に取り戻すべく、彼らの考えを正そうとしているところを読んでいます。今回は、「神の約束と律法」の関係について学びました。私たちは、キリストにあってアブラハムへの約束を受け継ぐ者とされました。神を信じたアブラハムが、神の祝福を受けるための義を、その信仰のゆえに得たという事実があります。同じように、私たちが神とキリストを信じる、その信仰によって神の祝福を受け継いでいるということです。これは、恵みの世界です。私たちが何もしていないのに、いや呪いを受けないといけないことをしてきたのに、それでも神が私たちがキリストにあって祝福するとお決めになりました。なぜなら、行ないによっては呪われること、律法によって明らかにされた呪いをキリストが身代わりに受けられたからです。

それでは、「律法の与えられた意味は一体何なのか？」という疑問が出てきます。神がアブラハムに約束を与えられ、それで十分であり、律法がそれを補うのだというのが、ユダヤ主義者の考えでした。「私たちがイエス・キリストを信じるだけでは十分ではない。他にもいろいろな規則を守ることによって救いを成し遂げるのです。」という考えを持っていました。「他にもいろんな良いことをすることで、救いを完成させるのです。」ということです。けれども、もしそうであれば約束を無効にしています。約束は遺言と同じものであり、変更されるものではなく、それで十分なのです。では、律法は何のために与えられたのか？という問いがあります。

それに対して、「律法は、キリストが現れるまでの養育係」の役目があることを示しました。律法によって、自分が罪の下にいることをさらに知ることができました。自分で自分を救えないことを知りました。律法の行ないによっては、決して義とされないことを、律法自体がこれでもかというばかりに明らかにしたのです。しかし律法はまた、罪を犯した者に対するいけにえの制度も教えていました。牛や羊のいけにえ、そして祭司による仲介、血を流すことによる神の赦しが、律法の中に示されています。そこでイスラエルの民は、自分たちが自分では救われることは決してないことを悟り、身代わりの死と流される血によってのみ、罪が赦され、洗われ、そして神の一方的な憐れみと恵みによって、賜物としての義を受け取ることを知ることができるようにしたのです。ちょうど、子どもが強い監督の中において、それで大人になるように、キリストが現れるまでの間は、その監督の中にといたのだ、という説明です。

それで今は、「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。(3:26)」と結論づけます。すでに神の子どもであり、そしてアブラハムの約束を受け継ぐ子孫ともなっており、アブラハムに約束された世界の相続を、自分も受け継いでいるということを3章の最後に話しています。そして私たちが、3章29節にある「約束による相続人」と呼ばれています。このとても豊かな霊的祝福があるので、私たちのルーツはどこにあるかと言うと、キリストとその御国にあるのだということに気づきます。これまでは、自分の成り立ちが民族であったり、社会的立場や経済的な力、性別であったりするものが、キリストにある者というアイデンティティーがあります。それで、私たちは一つになることができます。

1A 奴隷から子の身分へ 1-7

そして4章に入ります。4章では、ガラテヤの信者に対してもっと個人的に訴えていきます。分かり易い例えを用いながら、律法の中に戻ることのどうしようもない愚かさを具体的にもっと説明していきます。

1B 後見人の下にいる子供 1-3

1ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも変わらず、2父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。3 私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。

「約束の相続人」という言葉の偉大さは、私たちにはなかなか実感できないかもしれません。なぜなら、金持ちになったことがないからです。自分がある国の王の息子として、あるいは娘として生まれたら、ということを考えてよいでしょう。私たち日本国には皇室があり、天皇陛下と皇后がおられますが、そして皇太子もいますが、実は私たちの地位は、その地上の王室よりもはるかに高いところにあり、その富も莫大です。国々を治める神の国がキリストの内にあり、その御国を受け継ぐ者となっているのです。「黙示 1:5b-6 イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放し、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。」私たちの群れがどんなに小さかろうが、そこに神の国を臨ませておられます。

けれども、今、相続人というものを人間の世界の中でパウロは、考えています。もし、自分が成人の達していなければ、たとえ巨大な相続を約束されていても、後見人の下で奴隷と変わらないように生きています。自分の相続するものについて、どう取り扱うかについての権限は何も持ちません。大人になるまでは、後継人や管理者が物事の善悪を教えるために、その子をしつけます。ローマの社会の中には、少年は7歳になるまで幼児とみなされていたようです。そして17歳までは、小さな紫色の帯が服に巻かれるそうです。それで、それが、彼がまだ子供であることを示していました。そして17歳になると紫の帯のない服が与えられ、それで大人であることを示していましたが、25歳になってやっと仕事に関わる法的な権利が与えられます。そしてユダヤ社会の中で今はバル・ミツパと呼ばれる儀式が13歳に行われます。それによって大人になったとみなされます。

このような、人間の社会の中にある子供から大人になる移行を、パウロは、「律法からキリストの現われる日」までの説明としています。神は、イスラエルの民にアブラハムの祝福の約束を与えられました。相続人なのですが、しかし律法という後見人という監督の下に置いたのです。ここにあるように、それは「この世の幼稚な教えの下」であると言います。律法というのは、とても分かり易いものです。「これこれを行えば、祝福される」と約束されていますから、その戒めや定めを守り行なえさえすればよいのです。そして、律法は非常に具体的です。イスラエルが民として、その共同体生活をする事ができるように、律法によって、生活全般の細かいところにまで規則を定められました。食べ物についての規則、仕事上の取引、結婚関係、戦争についての制約など、いろいろな規則がありました。個人生活で、また社会生活で、秩序と調和の正しく取れた生き方をすることができました。しかし、もしそこに成熟した愛の関係、神への信頼や、そこから出てくる喜びや平安がなければ、どうでしょうか？ 外面的には秩序は守れていても、内実が伴っていないので、それは「この世の幼稚な教え」であるとも言えるのです。

今の教会生活で言うならば、例えばこんなことは起こらないでしょうか？「什一献金は、今の私たち、教会に対する命令なのか？」ということです。マラキ書において、主が什一を捧げなさいと命じられている部分がありますし、律法の中にも定められており、イエス様もないがしろにははいけないとマタイ 23 章で言われています。しかし、それほど新約では強調されていません。ゆえに、これは旧約時代のものであると決めている人々もいます。確かに新約聖書では、「神は喜んで捧げる人を愛しておられます。」「少なく蒔く者は少なく刈り取り、多く蒔く者は多く刈り取る。」という約束などがあるのみです。そこで、「什一献金はやりません。」という立場を取ったらどうでしょうか？ 実は、新約聖書においては、そうした規則ではなく、むしろ神がご自分の御子を私たちのためにお捧げになったという、惜しみなくささげる愛があるのです。その愛に応答して、自分の全生活を、財産も含めて主のものになっているという信仰が与えられます。ですから、什一と命じられなくても什一を捧げる、あるいはそれ以上を捧げるというのが、新約の教えであり、大人の考えです。

その反対に、「什一献金は、手取りなのか、それとも所得税控除前の給料からの計算なのか。」という質問もあります。このように細かい什一献金についての定めも、それに反対していても、推進している人たちにも、忘れられているのが、「神が御子を捧げられた。」という愛であり、その愛への応答であるのです。具体的な指針を示せばよいのかもしれませんが、大人は愛の律法を知っているので、自由に、愛によって神に仕えることができます。

2B 大人への贖い 4-5

4 しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。5 これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。

「定めの時」とパウロは言っています。成人になった時に遺産を受け取ることに、精密な法的手順をローマでは行なったそうです。それで、自分の財産として実際に受け取ることができます。

その例えをつかって、パウロは、「定めの時」を論じます。主が世の救いのために定められたのが、御子を遣わされた時です。今から 2020 年ほど前のことです。時はローマ時代、ローマがついに帝政に入った時です。それは、絶え間ない戦いが国々で繰り広げられ、後継者の戦い、内乱も経て、ついに、アウグストが初代皇帝となって、ローマ帝国が始まったのが紀元前 27 年でした。それから 23 年後に、私たちの主がお生まれになったのです。そして、その時は住民登録をするべく、全世界の勅令をアウグストが出しており、それでヨセフは身ごもっていたマリヤを連れて、ベツレヘムに行きました。

ローマ帝国が始まって、「パクス・ロマーナ」と呼ばれる平和秩序がありました。それは力による秩序に他なりません、もう反抗する国々や民族もおらず、世界的な秩序と平和が広がっていました。そしてローマは、輸送や交通において画期的な発展を遂げています。「全ての道はローマに通じる」と言われているように、ローマ全体を網羅する整えられた道路があり、今も遺跡がたくさん残っています。それから、言語はラテン語というローマの言語がありましたが、その前のギリシヤ帝国で使われたギリシヤ語が定着して、ローマ時代にも一般にはギリシヤ語を使用していました。このギリシヤ語が、とても精密な言語であり、単語の数も非常に多く、正確に物事を叙述できる特徴があります。福音書を見れば、イエス様はユダヤ人だけでなく、ローマ人やカナン人が信仰を持つこともありましたが、何よりも、使徒の働きでローマにまで広がる福音宣教があったのは、まさしくこの時代であったからこそできたものです。

また、ダニエル書の預言にあるように、ローマ帝国は鉄の牙を持つ第四の獣のように、強権でありました。反逆罪に対しては、十字架刑という容赦ない極刑で臨みました。ユダヤ人はバビロンによって祖国を失ってから、エルサレムに帰還したもののずっと異邦人の支配を受けており、そこからの解放をメシヤに求めていました。メシヤを熱望していたと言ってもよいでしょう。ちょうどその時に、イエスが来られたのです。ですから、「定めの時」でありました。

そして、「神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」とパウロは言っています。「御子を遣わす」という言葉はとても大事です。これは、神がご自分の子、神ご自身を宣教者として立てて、地上に宣教者として、使徒として遣わされたということとあります。神と同じ身分である方が人となられたのですが、それは神という属性は全く捨てていないけれども、地上にいる人々と一つになり、その中にいる人々を罪から贖い出し、ご自分のものとするために、神が遣わされたということとあります。宣教師が外国に遣わされる時に、その国の文化や社会がありますが、キリストのゆえに自分の文化や社会を捨てて、あるいは横に置いて、それで現地の言葉、文化、社会の中に入って、けれどもなおのことキリスト者としてのアイデンティティーを保ち、それでキリストを人々に紹介します。中国内地に宣教したハドソン・テラーは、清王朝の時代、自らも辮髪(べんぱつ)という髪型をして、キリストの証しを立てました。

そして、「この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者」と言っています。「女から生まれた者」という言葉には、一種の弱さを含めた言い方とあります。女が産みの苦しみをすることで、生身

の人が生まれます。イエス様は、全ての肉体の弱さを身にまといお生まれになり、十字架に付けられる時も、私たちと全く同じ肉体において付けられました。そしてこの言葉は、メシヤの預言、「女の子孫」も投影させていることでしょう。「創世 3:15 わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく。」処女マリヤが、聖霊によってイエス様を身ごもりました。

そして大事なのが、「律法の下にある者」とあります。つまり、ユダヤ人として生まれたということです。イエス様は人としてはユダヤ人であり、ユダヤ人であることをやめられませんでしたし、ユダヤ教徒としても生きられました。ユダヤ教のラビであられ、当然ながら、そこにある慣習や律法にも従われました。しかし、律法学者らが受け継いできたしきたりは、神の戒めをむしろ違反するようなものであり、神の戒めを守るゆえに主は敢えて、例えば彼らの解釈する安息日を破られました。しかし、神の律法自体を破られたのではなく、むしろ実質を無きものにしていったのは彼らのほうです。しかし、ユダヤ人は律法を守っていました。ヨセフもマリヤも、過越の祭りにはエルサレムに都上りをし、また主が生まれてから八日目には、イエス様に割礼を施し、律法の定める産後の清めの期間が終わってからは、初子を捧げる律法に従って、イエス様をエルサレムに連れてきて、捧げています。貧しかったので、鳩をいけにえとして捧げています。このようにして、イエス様は決してユダヤ人であることをやめなかったし、律法の下にいる者として生まれ、地上での人生を全うされました。

これは、私たちが日本に生きることにしても同じです。キリスト者になったということは、キリストに付く者になったということです。新しい帰属が与えられ、それは先ほど申し上げたとおりです。けれども、神の愛のゆえに、キリストを知らせるために、同胞の民にも付く者でもあります。

ですから、人となられただけでなく、ユダヤ人となられたわけですが、その目的は、「律法の下にある者を贖い出す」とあります。これは、出エジプト記を思い出していただければよいでしょう。奴隷状態にあったイスラエル人を、神は力強い腕で、パロとエジプトに災いを下しながら、エジプトから連れ出しました。つまり私たち、罪の奴隷、死の恐怖の奴隷にいる者を、その縄目から解き放って解放して、ご自分の所有の民とするのです。そして、そこには対価を支払っておられます。犠牲の子羊が過越の祭りにありましたが、その流された血をもって主は災いをイスラエルの家には過ぎ越されました。そしてイエス様は、十字架に付けられる前の夜、過越の食事において、ぶどう酒の杯を、ご自身の流される血であり、それが新しい契約のための印であることを教えられました。

そしてパウロは、「その結果、私たちが子としての身分を受けるようになるためです。」と言っています。その全ての目的は、私たちが後見人の下にいるような、幼稚な教えの中で監督にいるような状況ではなく、十分に神の約束された相続を楽しむことのできる「子としての身分」を得るためです。これを英語では adoption、つまり養子縁組ということです。私たちは、神と御子の関係の中に、養子縁組させていただき、それで神が御子に対して与えておられる特権や祝福、その選びや愛などを、私たちが神になることは決してないけれども、その分け前をいただくことになります。

キリストが父なる神に選ばれたように、私たちもキリストにあつて選ばれ、イエス様が聖霊に満たされたように、私たちも聖霊に満たされ、イエス様が十字架に付けられ、死んで、葬られたけれども、私たちも罪に支配された古い人が死に、そして三日目に甦りましたが、私たちも新しい命にあつて生き、そして肉体の復活にも後にあずかります。そしてイエス様は天から戻って来られますが、私たちは引き上げられこの方に会い、そして地上に主は戻って来られますが、私たちもこの方と共に栄光の姿で戻ってきます。そしてキリストが神の国を統べ治められますが、私たちにも共同相続として、共に統べ治めます。この方が長子となってくださり、私たちはその神の家族の中に招き入れられたのです。

3B 子としての特権 6-7

6 そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父。」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。

パウロは、子としての特権において、神を自分の慕う父としてあがめることのできる御霊が与えられたことを挙げています。既に私たちはローマ 8 章において、同じことを学びました。「8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。」まず、この三位一体の神が関わっておられることに注目しましょう。父なる神がおられます。そして御子がおられますが、この方が父を知っておられます。その御子が、御霊を父のところから私たちに遣わしてくださいました。神が三位一体において、私たちに近づいてくださったのです。ゆえに、キリストが父なる神に対して持つておられるその親密さが、私たちにも御霊によって与えられたということになります。

僕と息子の違いを、次のように対比することができます。息子は父と同じ性質を持っていますが、僕は持っていません。「2ペテロ 1:4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらず滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。」聖霊が与えられたことにより、新しい性質、神の性質が与えられました。次に、息子は父を持っていますが、僕には主人しか与えられていません。ですから、ここにあるように、「アバ、父」と言うことができます。ところでアバは、アラム語で「お父ちゃん」という意味です。ヘブル語も今は同じで、小さな子がお父さんのことをイスラエル人は「アバ」と呼んでいます。そのような親しみをもって呼ぶことのできる方となりました。イエス様は何度となく、ユダヤ人から、ご自身が神のことを「わたしの父」と言われたので、妬みを受けました。それはご自身を神と同一とされたということもありますが、それだけの親しさがあつたので、妬まれたのでしょう。

そして息子は、父から愛されている事を知っているので、愛ゆえに父に従順に従います。けれども僕は主人を恐れ、従わなければ罰せられることを知っているので従います。我々、キリスト者の戦いはここです。私たちが自分が何かできていないことをことさらに自意識が強くなって、責めます。けれども、戻るべきは「神に愛されている」ということです。神の愛があつてこそその、そこから出てくる愛の従順です。そして最後に、僕は貧しいですが、息子は豊かです。これは放蕩息子の話を思い

出すとよいでしょう、彼は財産の全てを使い尽くして、僕として父に雇ってほしいと申し出ました。しかし、父は恵みに拠って彼に息子の身分を回復させ、それで祝宴を開きました。そしてもう一つの違いが次です。

7 ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。

奴隷は相続がありませんが、息子にはあります。私たちはまだ、その相続の全てには預かっていませんが、主が戻られてから預かることができます。体の贖いがなされ、そして主と共に地上に戻ってくる時は栄光の姿で戻ってきて、そして御国にあずかります。私たちの歩みは、地上における歩みはとても地味なものです。しかし、これだけ霊的には恵まれているのだということを決して忘れてはいけません。

2A 奴隷への後戻り 8-11

ここまでを話して、今、ガラテヤ人の信者が陥っている律法主義について、叱責を与えます。

8 しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした。9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。

パウロは、以前異教徒であったガラテヤ人に対して語っています。イスラエル人が律法の教えの監督下にあったように、ガラテヤ人たちも異教の教えと儀式の奴隷になっていました。まず、さまざまな肉欲の奴隷でした。その中で苦しんでいました。また儀式があり、そこにもさまざまなしがらみがあります。天地創造の神との関係は元より、家族の間にある信頼関係、愛の関係までもが押しやられています。本来は神ではない神々の奴隷であると言えるでしょう。ガラテヤ人も以前は、そのような者だったのです。

ところが、ガラテヤ人たちは、神を知ることにより、そのような異教を捨て去りました。パウロは注意深く、「神を知っているのに、いや、むしろ神に知られている」と言っています。そうです、私たちが主体的に神を知ったという事実はあるはありますが、それよりも、主が私たちが初めから知っておられ、それで憐れんで選んでくださったのです。私たちが神を知っているよりも、神が私たちを知っておられます。これは大きな慰めですね。そして、そのような肉の欲望や空しさ、異教のしきたりから自由にされました。キリストにあって自由にされました。

しかし、偽教師たちが彼らの教会に入り込み、モーセの律法を守らなければ救われないと教えたのです。その教えを受け入れて、彼らはさまざまな儀式を行ない始めました。それはあたかも、自分の霊を高めて、それで救いの完成へと導くもののように見せていますが、実は昔のしきたりと何ら変わらない、奴隷状態にするものなのだということです。「無力、無価値」とパウロは言っています。無力なのは、律法はそれを守り行なう力は与えないことです。それから、無価値なのは、せっかく約

束の相続を手にして、計り知れない富を手に入れたのに、それを信仰によって喜ぶのではなく、律法の下で僕となって、財産を得ていない状態なのだということです。

4:10 あなたがたは、各種の日と月と季節と年を守っています。

日は安息日のことです。月は新月のことでしょう。季節は、過越の祭りなど例祭と言われているものです。そして年は安息年やヨベルの年がありました。このようなものを守っているのは、あなたがたが昔、がんじがらめになっていた異教と何も変わらないのですよ、と言っています。これらのことを守ること自体は、間違っただけではありません。ユダヤ人でイエス様を信じている人は、これらのものを緩やかに守っていることがあります。それは、キリストがなされた業を思い出すためであり、またユダヤ人の中に囲まれている中で、社会的にそれを守っていたほうが、つまずきを与えないということもあります。しかし、これはイエス様の姿勢と同じように、愛によって行なうもの、福音のゆえに行なうものです。けれども、これらを行なうことによって救いの足りないものを補おうとするならば、何らかの形で霊性を高められるものとして行なうならば、それは大きな間違いであるということです。

私たちは気をつけなければいけません。なんらかの規則、活動、何かに属しているということが、自分が他のクリスチャンよりも高い所にいるのだという気にさせるのであれば、それは危険信号です。私たちが立っているのは、飽くまでも、「キリストの十字架」です。罪赦された罪人、神の恵みに拠って救われた者であります。その恵みに生かされている者として生きています。

11 あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないかと私はあなたがたのことを案じています。

パウロは、自分が福音をガラテヤの地域に宣べ伝えたのにもかかわらず、彼らが異なる福音を受け入れてしまったことにごっかりしています。彼らは、ほとんど神を捨て去ってしまい、ほとんどキリストを捨ててしまったのです。信者であったところから、ほとんど不信者になってしまったのです。台無しになる時は、瞬く間にそうなりますね。育てるのは時間がかかります。手間がかかります。労苦が伴います。しかし、何かに引っかかれば瞬く間に台無しになります。そこで後でパウロは、「産みの苦しみを再びしなければいけない」ということを話します。

いかがでしょうか、私たちは点検する必要がありますね。自分が規則によって生きてしまっているか、それとも父と子の関係の中で生きているか？であります。